

彫金師と民兵

庭師

突然、辺りが真っ白に染まった。雑踏、ざわめきが彼方へと吹き飛び、訳の分からないまま私は体を後ろに引っ張られ地面に倒れ込んだ。固い石畳の地面が私の頭と体を容赦なく攻撃する最中に見た世界は不思議な事に廻っていた。

ふと気がつくとも体の節々が痛んだ。頭部全体は何か締め付けられているような感覚に襲われ額の辺りが脈打っている。それを振り払うように私は頭を振るが、さしたる効果はなかった。相変わらず私の世界からは音が無くなり、奇麗に並んでいるはずの石畳の地面がグラグラとぶれている。そしてなぜ赤かった。どうやら瞼が切れているようだった。どちらかは解らない。口の中も鉄の味がする。

立ち上がろうと足に力を入れようとしたが、うまく力が入らなかったから、赤ん坊のように地面に手をつけて張って移動した。前後左右、なにがなんだか解らないが、その場にとどまり続けるよりましだと思ったから。途中いやにぬめった物に手を突っ込んだり、ぶよぶよした物が膝に当たったりしたが、何かは考えないようにした。

揺れていた視界が徐々に元に戻って行く。どこかへ言ってしまっていた音も徐々に戻ってくる。鼓膜が吹き飛んでいなくてほっとした。

何か固いような、柔らかいような物が頭に当たった。顔を上げてみると、兄の姿が見えた。私の頭が当たったのは兄の膝の裏だった。

兄さん、と声に出そうとしたとたん私は激しく咳き込んだ。そこではじめてジリジリとした喉の痛みが気がついた。

ダラリと垂れ下がっている兄の腕を支えに私はヨロヨロと立ち上がる。やっとの事で立ち上がった私は兄が小刻みに震えている事に気がついた。頬に手の甲を当ててみると湿っていた。

兄の腕が私にまわる。腕は力強くしっかりと、私が倒れないようにしっかりと抱いた。

バンツと乾いた音が響き、一陣の風が吹き抜ける。

髪がバサバサとのたうち回り、私は落ちていた視線をあげる。

燃えて崩れかけているステージと黒い煙が見えた。

無惨に破壊された死体が血溜りを作り、千切れた足やら腕やらが転がっている。

華やかだった式典はもはや跡形も無く、目前の景色は混沌そのものだ。

それとは裏腹に頭上の空は雲一つなく澄み切っている。

私は世界と神を呪った。何回目の呪いかはもう忘れた。

きい、と軋んだ音を立ててドアが開いた。

「いらっしやい」

やってきた客人に僕は手元に視線を落としたまま声を上げた。

「すまない、取り込み中のようだな。日を改めた方がいいか？」

ハスキーな声だった。顔を上げてドアの方を見てみると、ドアノブに手を掛けた女性がこちら

の様子をうかがっていた。

「別にそこまで気を使わなくていいよ。もう少しで終わるから」

バーのパーティションを改造して作られた作業台の端に並んでいるマグカップから、適当な物を選ぶと手近のポットからコーヒーを注ぎ、身を乗り出してカウンターに置くと、僕はまた作業を再開した。

コツコツとこちらに足音が近づいてくる。続いてガチャリとどこか金属質を含んだ鈍い音が響き、チェアが軋んで僕のすぐ目の前に人の気配が現れた。

今しがたエングレーブを掘ったばかりのオイルライターの表面をサンドペーパーで磨きながら、少しだけ視線を上にあげてみると、細い顎と浅黒く日焼けした肌、闇の中でスタンドライトの明かりを反射して輝く金髪が見えた。下のカフェで食事をしてきたのかほんのりコーヒーの匂いもする。

全体的に研磨が終わったライターをデスクスタンドの明かりにかざし、二転、三転と裏返して掘りミスや研磨の具合を確かめる。何かにエングレーブを施したのは一ヶ月ぶりだ、ガラクタ相手に模様を描く練習は欠かさずしているがやはり、持ち込まれた物に施すとなると話は違ってくる。ミスなんてしたらクレームをつけられるどころか、その物を弁償しなければならなくなるからたまった物ではない。が、見た所掘りミスもなく自分でも納得のいく模様が描けているので大丈夫だろう。

「ごめんよほったらかしで。それで？」

ライターを作業台の上に置いた僕はふう、と息を吐きつつ椅子に深く腰掛けて客人に改めて向き合う。そこには鋭い目つきの、シャツの上から黒いベストを着た女性が僕のことは見下ろしていた。そんな女性の目の奥にある瞳は、綺麗な空色だった。

「ガンミスがいると聞いて来たんだが……エングレーバーと聞き間違えたかな」

「こっちが本業なんだ、銃関係は副業だよ」

「まあいい。主人はいるか？」

「僕が店主だよ」

一瞬だけ目を丸くした女性はすぐにまた落ち着きを取り戻すと、何も言わず身をかがめ、カウンターの上にライフルケースを置くとファスナーを外し上蓋を取った。

「おや」

現われたのはアサルトライフルだった。しかし従来のような一目で銃だとわかる物ではなく、ストックは細く駆動部分から先に行くごとにフレームの上部が丸みを帯びており魚のような形状をしていた。SFチックと言えはいいのだろうか。どこか現実離れしていてこんな玩具のようなものが本当に弾丸を撃てるのかと疑いたくなる。

「コイツのバレルを20インチ程度でいいから長くしたいのだが、乗せられるバレルはあるだろうか？ あと少し倍率が高めでクロスヘアのダットサイトがあればそれも貰いたい」

「マークスマンタイプにしたいみたいだね。この銃だとエルカンかACOGが合うだろう。でもバレルとなると……」

「やはり無理そうか？」

カップを口元の辺りで止め、女性は探るような視線を僕に向ける。

「こんな形状のライフルなんて初めて見たからね。メーカーはどこだろう。専用の物を生産してるか、従来の物でも互換性があればいいんだけど」

カウンターの上に横たわるライフルを手にとってみる。小銃にしてはえらく軽かった。銃のマガワ、はほとんどポリマーフレームが覆っており、金属部分はバレルと駆動部分だけのようだ。

「まあでもパーツが無かったら作ればいいだけの話だし」

「そんな事できるのか？」

「五日ほど、この銃を預かせてもらってもいい？」

顎に手を当ててしばらく考え込んだ後、彼女は一言「ああ」とだけ答えた。

「スコープは正規の物があるけどバレルはこっちで作るから少し安くしておくよ。前金で半分ほど頂くけどいい？」

「いくらだ？」

「三万六千ほどで大丈夫だよ」

「……アバウトだな」

訝しがるように眉を潜めた女性はポケットから財布を取り出すと中から紙幣を抜き取りカウンターの上にそっと置いた。

「仕事はきっちりやらせてもらうから安心してよ」

紙幣を手にとり指定した額がある事を確認すると、半分に折ってエプロンのポケットに突っ込む。ライフルケースのファスナーを閉めて作業台に立てかけ、ズボンのポケットから煙草のケースを取り出し、一本くわえて火をつけた僕は作業台の上に視線を戻すと無造作に転がっていた銃をとり、手早く分解する。

いつの間にか、女性はいなくなっていた。

二日後、早く起きた僕は例のライフルケースを持って工房を出た。太陽はまだ昇り始めた時間だったけど徐々に浴びる陽光はまぶしかった。

【デュランの店】とだけ書いてある所々が焦げた看板が張り付いているドアにしっかりと鍵を閉めた僕は階段を下りると、店の裏手に回った。

全体的に丸みを帯びたデザインの車は、当時鮮やかだったであろうマットなイエローのボディは埃や泥ですっかりと汚れ、バンパーやミラーもくすんで、シルバーのメッキが所々がはがれてサビついている。

僕はその車に鍵をさしてロックを外すとドアを開けるなり助手席にケースを立てかけるように置いて乗り込んだ。

エンジンをかけると車全体がブルリと大きく揺れ、ボンネットから喧しい音が上がる。サイドブレーキを外しクラッチを放すと同時にアクセルを踏み込むと、今にもくたばってしまいそうなビートルはその外見とは裏腹に、力強く走り出した。

街の出入り口、軍の詰め所を抜け、西の方にのんびりと車を走らせて一時間が経った頃だろうか。まず最初に顔を現したのは巨大な貯水塔だった。続いて青い屋根と赤い壁の巨大な工房、

その隣に建つ三階建ての細長い母屋が順々に見えてくる。

敷地の中に入り、貯水塔の端に車を停めるとエンジンを切り助手席のバッグを持って車から降りた所で倉庫の方に向き直ると、ちょうど工房から出てくる初老の男の姿が見えた。

「やあベーゼルさん」

声を投げかけると初老の男は「おう」といって手を挙げた。

「来たかノワール、まತ್ತたぞ。とりあえず工房の方に移動しようか」

ベーゼルさんの後ろを歩き、薄暗い工房の奥に入っていくと作業台が一つ現れた。今までそこで作業でもしていたのか、端の方にポットとカップが二つほど置いてあった。

ベーゼルさんはそのカップの一つにポットからコーヒーを注ぐと、僕に差し出し、代わりに僕はライフルケースを渡した。

作業台の上にケースを置くなりベーゼルさんはすぐにファスナーに手をかけた。上蓋を開け中身を見ると一つ、うなり声をあげ、

「いやに軽いな。ここまでフレームにプラスチックを使ってる銃なんて見た事ないぞ」

「口径は6.8。弾は5.56mmと6.8mmと平均的なアサルトライフルだね。カービンモデルのこれをマークスマンにしたいとき」

構えたり、銃口の先からストックまでじっくり見つめているベーゼルさんの背中に向けて言葉を投げると、ベーゼルさんは無言で銃をケースに戻し、僕の方に振り向いた。椅子のキャスターがギィと音を立てる。

「刻印もなし、形も見た事がない……コイツを持ってきた奴はどんな奴だった」

「日焼けした女の人だったよ。多分軍人。瞳が青で金髪。ノーランド人だね」

「元敵国か。また、日く付きな人間から仕事を頼まれたな」

「いつもの事だよ。中の基本設計はむこうさんに基づいているみたいだけど、ガワはうちの国かな。キャリングハンドルの形が似ている」

「ふうむ……」

眉間に皺を寄せ、ベーゼルさんは煙草をくわえて火をつけると鼻から紫煙を漏らす。僕は何となくベーゼルさんが今考えている事が解った。

「断った方がよかったとは思ってるよ」

「じゃあどうして受けた」

「単純に金がなかったって言うのもあるし何より、今後そういった銃が主流になるかもしれないと思ったからだよ。知識に入れておいて損はない」

「一理あるかもしれないが、金より命だろう」

「金がなければ、食べていけないさ」

ぶっきらぼうに言った僕は持っていたマグカップに口を付け中身をすする。口の中に苦みと後を引く酸味が広がった。

「まあ受けちまったもんはしょうがない。物は作ってやるよ。しかしだ、よくよく気をつけろよノワール」

「すまないね」

中身を全部飲み干した僕は作業台に歩み寄るとマグカップを置いて、代わりに例のライフルを手

に取り、バレルだけ外してベーゼルさんに預けると工房を出た。

物を一から作るとなるとまず図面引きからはじめねばならず、そういった神経を使う仕事をしている時ベーゼルさんは工房の中に自分以外の誰かがいる事を嫌う。こういう時僕が出来る事と言えば、外で煙草をふかすか、母屋で食事の支度をする事くらいだった。

工房の陰にベーゼルさんがベンチ代わりにでも使っていたのだろうか、しっかりとした作りの木箱が置いてあった。僕はそこに腰を下ろすとバレルの着いていないライフルを改めてしげしげと見つめる。

形といい、軽さといい、間違いなく市場に出回っている物ではなかった。それにグリップを握ったとき、大きいとは言えない僕の手でも奇妙なくらいしっかりと来たのは、たまたまその太さと僕の手の大きさが合っていたと言う訳ではなく、誰が握っても手になじむように人体工学に基づいて設計された様子がうかがえる。あの女性の風貌を見る限り、普通にどこかの店で購入したという訳ではなさそうだ。

と、そこまで思った所で僕はなんだか嫌気がさして考えるのを止め、はあ、と一つ大きめのため息をついてライフルを壁に立てかけ空を仰いだ。

図面が完成したのはおおよそ三時間が経った頃だった。返してもらったバレルを銃に戻し、ベーゼルさんに先に代金を支払った僕は自分の車に乗り込んだ。完成まではもう少し時間がかかるらしく、出来た物は郵送してもらう事にしたからだ。

バレルは三日後に僕の所に届いた。銃につけてみると、まるで最初から着いていたと思えるくらいしっかりと作られており口径の寸法も一ミリの違いもなく、十年前と、割と最近まで小さな田舎の村の図書館で、司書をしていた男の仕事とは思えない出来だった。女性が店に来たのはその日の昼頃だった。

「いらっしやい」

声をかけつつ、五日前と同じように僕はカップを手にとるとその中にコーヒーを注ぎ、ソーサーの上に乗せると砂糖とミルクとマドラーを添え、椅子に座った女性の前に置いた。

「出来ているか？」

「この通り」

僕は作業台の上に乗っていたライフルを彼女に渡す。受け取った女性は先ほど取り付けたばかりのバレルをしばらく眺めた後、銃口を僕の方に向けると軽くかまえ、サイトをのぞいた。

「こっち向けないでよ。弾は入ってないと言えど良い気分じゃない」

「光源がデスクスタンドだけなのだから仕方ないだろう」

「弾が入ってないからいいけどさ。サイトはACOGにしておいたよ。エルカンより倍率を高めに調節できるからね」

「……悪くないな。少し接眼部分が後ろにより過ぎだが、少なくとも前のドットサイトよりはマシだ」

ライフルをおろしケースにしまった女性は財布を取り出すと紙幣と硬貨を数枚取り出し、カウンターの上に置いた。僕はそれに手をのぼし金額を数える。五日前に指定した額の半分ピッタリ

があった。

「丁度だね」

「これなら問題ないだろう。助かった」

「ああ、ちょっと待ってよお姉さん」

ケースにライフルを戻し、ファスナーを閉めかけている女性を呼び止めた僕は、

「帰る前に一つ聞きたいんだけどさ、そのライフルどこで入手したの？」

「コイツが気になるのか？」

「そんな銃を持ってきたのはお姉さんだけだもの。市場にも出回ってないしね。差し障りのない程度でいいし、答えられないなら答えなくてもいいからさ」

「まあいいだろう。コイツは、」

そこまで女性が言いかけたときだった。閉め切っている網戸と窓が砕け手のひら大の筒が複数個飛び込んでくると、一泊の間を置いて筒は真っ白い白煙を吐き出した。

うわっ、と声を上げ口を塞ぐ僕の前でいち早く反応した女性は、ケースを持ったままカウンターの上に手をつけて跳躍した。そのままパーティションを乗り越えると僕のシャツの胸ぐらをつかんで椅子の上から引きずりおろし、隣で自らも膝をおり姿勢を低くする。

それから間もなくしてバンッとドアが蹴り開けられる音とともにドカドカと何人かが店の中に入ってくるのが解った。

「いたた……なんなんだいったい」

ぼやく僕の口をさっと塞ぎ、女性はジャケットのファスナーを真ん中辺りまでおろすと懐に手を突っ込んだ。その手が再び僕の目の前に現れたときは少し大きめの真っ黒いオートマチックピストルを握っていた。

(店主、君も武器を持っているか?)

小声で、女性は僕に耳打ちする。

(持ってないよ。ここにある銃は全部預かり物だ)

(解った。では、正面の入り口以外にここに出入りできる所は?)

(僕の私室の窓くらいかな)

(ではそこから出よう)

(ちょっと待って)

椅子の下に置いてあった肩掛けのバックをとった僕は、少しだけ身を乗り出すと作業台の上に散乱している工具類やサンドペーパー、塗料をかき集めていっぺんにバックの中に詰め込んだ。すっかり愛着が湧いてしまっているから万が一壊れたり無くなりでもしたら仕事が出来なくなるだけでは済まない。

(じゃあいこうか)

バックを肩にかけ終わった僕の腕をぐいっと女性がつかむ。ドアの前までくると女性は素早く立ち上がり、目前にいたガスマスクをつけてナイフを持っていた男に銃を向けトリガーを引いた。室内に怒号が響く。僕はその隙にドアを開け私室に飛び込み、閉まりかけたドアの隙間に女性が体をねじ込み、無理矢理転がりこんでくる。

僕は手近に置いていた棚を持ってくると、ドアノブの下に設置した。高さが足りるかどうかな

安だったけど、なんとかノブの柄が柵の天板に引っかかりロックする。ドアの向こうからた銃声が響くとともに、ドアに穴が空き僕の頭の上を甲高い音を立てながら銃弾が通り抜けて床にめり込む。

体が強張って行くのが解った。背中にジットリとした嫌な汗を感じる。

「店主！」

ガラリと窓が開く音がした。顔をあげてみて見ると、女性が開け放たれた窓の前に立ち、激しい音を立てるドアに向けて銃口を向けていた。

女性が首を右にクイックイツと小刻みに揺らす。先に行けという事らしく、強張る足をひっぱたいてふらふらと立ち上がった僕は窓の棧に足をかけるとそのまま下の生け垣に飛び降りる。植木がクッションになってくれたけど袖を捲っていたせいで、小枝が何力所か僕の腕と顔を引っ搔いた。

僕が植木の上から退くと同時に、女性が降ってくる。女性は葉をかき分けて僕の隣に立つと、

「車だ」

と簡潔に言い放ち、目の前に停めてあったジープの運転席側に周り、ドアノブに手をかけた所で、突然悪態をついてブーツの先でタイヤを蹴った。よく見てみるとタイヤがペチャンコに潰れている。隣に停めてあった僕のビートルも同じようにとても走れる状態ではなかった。

「用意周到な連中だね」

「腹が立つくらいにな。店主、他に逃げる方法は無いか」

「おいで」

車から目を離し、僕は街路に向けて歩みを進めた。街路は時間も昼という事もあり、人でごった返していた。女性と一緒に人の波に逆らって進んでいると後ろの方がなんだか騒がしくなったような気がしたが、この分であればそうそう簡単に見つかる事もないだろう。しばらく町の北の方へ進み、建物の間に挟まれている倉庫のような所の前で足を止めた。正面の巨大なシャッターは全開で、建物内のど真ん中に停めてある車の下から足が突き出ていた。

「ニコロ」

僕が名前を呼ぶとその足がピクリと動き、^{クリーパー}寝板に乗った男が車の下から現れる。

「よおノワールじゃねえか久しぶりだなあ」

そういうとニコロは寝板から起き上がりオイルで汚れた顔とは正反対の真っ白い歯を見せた。

「今日は何のようだ？ ん、オメエが女連れてあ珍しい事もあるもんだな。お前のこれか？」

右手の小指を立ててからかうニコロにまさかと返し、

「僕のビートルとこの人の車のタイヤが誰かさんに穴をあけられてしまってね。その修理と、あと大至急車を一台貸してほしい」

「なんでまたそんな事に。たちの悪い悪戯か？」

「ちょっと込み入った事情でね。今は話してる暇はないし、僕も半ば事態を飲み込めていないんだ」

「なんだかただ事じゃないみたいだな」

ニコロは険しい目で僕と女性の顔を交互に見つめる。口の周りに生えている無精髭を何回か撫

でる。彼が何か考え事をしているときのクセだった。

「……しゃあねえなあ」

ハァーっ、と大きく息を吐いたニコロの顔から険しさが消え、代わりに呆れと若干の困惑が浮かぶ。

「お前にはエングレーブやら部品関係の事で何かと世話になってるからなあ。後でちゃんとワケをはなせよ？ で、問題の車は二台ともお前の店の駐車場だな？ 持ってくる車はどんなの、」

「丈夫で悪路も走行できるものであれば何でもいい。あるか？」

言葉を遮り、女性が口を開く。面食らったのか目を丸くしつつもニコロは、

「ちょっと待ってろ……」

後頭部をかきながら壁にかかっている鍵に手をかける。ガレージの中にカチャカチャという快音が反響した。

「ほれ」

鍵束の中から一本選び抜くとそれを女性に放る。

「裏にランドローバーが停めてある。ソイツの鍵だ。整備代と借用代は後でまとめてノワールに請求する。これでいいな？」

「十分だ」

「ぶっ壊れた部分を直してこの前やっと走れる状態にこぎ着けたんだ。くれぐれも無茶はするなよ？」

「ありがとう。注意する」

ニコロに礼を言った僕達は脇を通り過ぎると、ガレージの勝手口から外に出た。何台か止めてある車のうち、角張ったフォルムと塗り直したばかりのアイビーグリーンボディはすぐに見つかった。

「……目立つなあ」

眩きつつ、僕はキーを女性に渡す。

「今はわがまま言っている暇はないだろう。さあ店主、君も乗ってくれ」

「ちょっと待ってよ、僕も行くのかい？」

「追いかけてきた奴もいるだろうが、戻ってくる事を警戒して何人か店の近くに張り込んでいることも考えられる。今戻れば捕まる可能性が高いが、それでいいのか？」

「お姉さんさあ、いったい何やらかしたの？」

「やらかしたのは私ではなく向こうだ。詳細を話す前にまずは乗ってくれ」

言い放った女性は鍵穴にキーを差し込んでロックを外すと、運転席に乗り込んでエンジンを吹かす。ボンネットから響いてくるエンジンの音は重密で力強かった。

僕も渋々後部座席のシートに治まる。ドアを閉めると同時に車は走り出した。

「すまないな、巻き込んでしまつて」

検問所を通り過ぎ、町の外に出て一時間ほど立った所で女性は口を開いた。

「やっと口を開いてくれたのは嬉しいけど今更謝られてもねえ。町中で怪しい奴らは見かけた

けど、襲われなかったし追っ手もないみたいだから別にいいけど」

シャツの胸ポケットからタバコを取り出してくわえた僕はそれに火をつけて少しだけ多く煙を吸い込んだ。舌先に走るピリピリとした苦みがいつもより心地よく、やっと一段落つけたような気がした。

「とりあえずお姉さんは何者で、何をやらかして、僕はどこに連れて行かれるの？ そろそろ教えてくれてもいいんじゃない？」

言いつつ後部座席から前方の風景を見てみると、正面に高い山が見えた。どうやら女性は山岳地帯の方に向かっているようだった。

「エモリア自治州を知っているか？ 目の前の山を越えた所にある」

「何度か聞いた事なら」

「かつてはノーランドだった場所だ。国境の真横にあり、しかも少量ながら資源もとれるという事で十年前の戦争ではよく領土争いの場にもされた。終戦と同時に、いったん君たちの国の領になったがそれがあまり好ましくなくてね、かといって戦争中のノーランドのやり方にも不満感もあり、君たちの国の主権の下に属しながらも地方自治として独立したんだ。政経も待遇も君たちの国がいいからね……すまないが私にも一本タバコをくれないか」

「僕の弱いよ？」

「煙ができれば何でもいい。なんだかそういう気分なんだ」

箱の底を弾いた中指で叩き、頭を出した一本を取り出すと僕は女性に差し出す。それをくわえた女性は片手でハンドルを握りながらもう片方の手でポケットからライターを取り出すと火をつけた。

「しかしよほどエモリアが君たちの国にとられたのが悔しいのか、はた迷惑な事に未だに往生際の悪い元自国の政治家達がちょっかいをかけてくる。しかも使っているのが正規軍ではなく、私兵部隊やわざわざ傭兵を雇って送り込んでくるんだ。君たちの国がこの事について元自国に問いつめているみたいだが、どうやら根回しが行き届いているらしく、証拠がつかめないせいでやりたい放題だ」

「それはいつからなの？」

「五年前からだよ」

うんざりしたように言って女性はタバコの煙を吸い込んだ。

「君たちの国の正規軍は介入しているけれど、相手が正規ではないから思うように手が出せない状況におちいつている。下手に攻撃して死者を出してしまえば、狡猾な議員達が国家に難癖を付けて、小競り合いですんでいる物がまた戦争になってしまいかねない」

一息にそこまで言った女性は窓を開け、長くなった灰を外に落とすと再び口にくわえて紫煙をくゆらす。タイヤが小石に乗り上げたのかガタンと車が揺れる。地面がいつの間にか整備された道路ではなく野道にかわっていた。

「警察の連中はそうそうに引き上げていった。軍も手が出せない。だからといって、いつまでも黙っている訳にはいかない。そこで五年前に、私たちは民兵団を結成した。民間の自警団故に国と国ではなく自治州が自発的に立ち上がったのだから、正規軍や警察組織が手を出すより戦争にはなりにくい。万が一なりそうになった時は国を後ろ盾に使える。`身軽な軍隊、がエモリア

には必要だったんだ」

ふう、と煙を吐き出した女性は灰皿に吸い殻を押し付けた。僕もそれに習う。

「しかし、堅気ではないとは思っていたけどそういう人だったとは思わなかったよ。なんだか大変にな事になってる事は知っているけどそんな火薬庫みたいな状況だとも。そんな所に僕は連れて行かれちゃうのかい？ 全くなんて素敵なんだろうね」

「このまま町に居残れば必ず君は何らかの被害にあう。ホテルやレストランもあるし二日三日いれば騒ぎも治まっているだろう。その為に必要な金はこちらが担保するし、できるだけ丁重に扱わせてもらう」

「……僕の店をめちゃくちゃにしてくれた男達は何なんだい」

前置きをせずに切り出した僕はタバコを取り出しつつ、目だけを動かしてバックミラーに映る女性の顔の上半分をにらむ。

「恐らく私を捕らえるか、殺すために雇われたジョブキラー殺し屋だ。動きからして、私兵部隊ではないし、傭兵ももっと上手くやる。安金で雇ったチンピラじゃないか？ 札束をちらつかせて社会の裏側を突っけばそういうアブレものはわんさか湧いてくる。たまにあるよ。奴らは私兵や傭兵よりフットワークも軽くて変えも効く。こういう汚れ仕事にはもってこいだ」

「じゃあ、ソイツらが狙っていたお姉さんは何もの？ 普通のレジスタンスの人間がわざわざ狙われるわけないよね」

「そういえばまだ名もいってなかったな。私はエヴィーテ。エヴィーテ・アンドラーレ。五年前に民兵団を立ち上げた男の妹だよ」

トンネルを抜けると木々の間から夕日を反射して輝く湖が見えた。対岸には湖の輪郭にそって町並みが広がっている。町の更に向こう側、夜の陰りが差している山の上の方に油田の炎がいくつか揺らめいていた。

十分ほど車を走らせると検問所と赤と白で塗られたゲートバーが見えてきた。道の両脇に立っていた二人の兵士が道の真ん中に立ち、進路を塞ぐ。エヴィーテが車を止めると、兵士の一人が窓をノックした。

「おつかれ」

ウィンドウを下げ、エヴィーテが顔を見せると兵士は怪訝な顔で車内を覗き込み、

「エヴィーテか。朝見たときと車が違うな。助手席のソイツは？」

「出かけ先の建物の中で待ち伏せされた」

「ノーランドの奴らか？」

「ただのチンピラさ。うまい事建物から脱出した方がいいが車をやられてね。危うく殺されかけた私に車を用意してくれたのが彼だ。町に残すのは危険だからつれてきた」

「何はともあれ、無事でよかったぜ。お前さんが殺されたとなっっちゃあ兄貴が戦争をおっぱじめちゃう」

もう一人の兵士が上半身をひねり、背後に叫ぶとバーがあがり道が開放される。

「さあとおんな」

兵士二人が一步後ろへ下がり、敬礼する。窓を閉めたエヴィーテはアクセルを踏み込んだ。し

ばらく進むと町の中に入る。夕方から夜に移り変わるエモリアの町は街灯に照らされ、店や集合住宅から漏れる明かりでまぶしかった。それ故か、道路に開いた穴や崩壊しかけた建物も目についた。

「こちら辺で飯にしないか、店主。美味しい店があるんだ。騒ぎに巻き込んでしまったお詫びにおごろう」

「ノワールでいいよ。ご飯か……そうしようか。もう半日も揺られてくたくただ。タバコもなくなっちゃったしね」

ウィンカーを出し、エヴィーテは角を曲がる。通りとは反し、路地は街灯の明かりしかなくほの暗かった。ヘッドライトの明かりを頼りに適当なパーキングを見つけるとエヴィーテはそこに車を押し込んだ。

車を降りて僕達は今来た道を引き返す。通りに出ると、車の中で見た時よりその場にぎわいがダイレクトに伝わってきた。ホットスナックを売る露天には人だかりができ、レストランやパブは食事をする人であふれ、まだ夜になったばかりだというのに酔っぱらい達が喧嘩している。とても大国を相手に小競り合いをしているようには見えなかった。

雑貨屋でタバコを買って僕達は店に入る。通された席は窓際で通りが一望できた。僕達が椅子に座ると同時にウェイターが水の入ったコップとピッチャーを、黒く変色したテーブルの上に置く。料理をいくつか注文し、僕とエヴィーテはコップの水を一気に飲み干した。数時間ぶりに口にする水はカラカラに乾いた喉を潤し生き返るようだった。僕はタバコに火をつける。エヴィーテは二杯目を注ぐ。

「なんか、イメージしてたのと違うね。ここまでにぎやかだとは思わなかったよ」

一心地着いた所で僕はそう切り出した。

「エモリアは国境付近にある町では大きい部類に入る。資源が手に入るだけでなく、水も空気もいいから魚もうまいし、作物もいい物ができる。昔からここは交易に使われていて、みんな商売気質なんだ」

「でも、それだけってワケじゃないみたいだね」

僕は店の中と外の様子を改めてもう一度見る。ホットスナックを売っている露天商も、それを買いに並ぶ人々、レストランやパブに入っていく人々、喧嘩をする酔っぱらい達も、他のテーブルで食事をする人々も、気持ち悪いくらいに同じような笑顔を浮かべていた。上っ面に貼付けられただけの笑顔というのは顔の上半分にちょっと意識してみるとすぐに解る。口角があがっていても目の奥は奈落の底のように真っ暗なのだ。

「あまり気持ちのいい物ではないだろう。戦争が終わってもずっとこうだ」

エヴィーテはテーブルに肘をつき組んだ手で口元を隠す。見えている上半分の顔は沈んでいた。

「十年前、確かに戦争は終わった。道を歩いていても無条件で撃たれる心配もなく、夜襲におびえ、震えながら眠らなくてもいい。混沌としていた日常にまた秩序が戻り、平和になったはずだが、エモリアは違う。戦時中ほどではないにせよ、武装した軍人が町を闊歩し、町の一角では定期的に戦闘が繰り広げられ、その度に人が怪我をし、死んでいる。平和だったのは、戦争が

終わってからたった五年の間だけ。鬱屈とした表情をしていると更に気分が重くなるから、みんな無理にでも笑っているがそれが逆に滑稽だ。君もそう思うだろ」

「僕には何とも言えないね。ただおかしいとは思うよ」

カランと、ドアベルが鳴る音がした。何となく店にいるときのクセでそちらの方を見てしまった僕の目に、今しがた入ってきた客の姿が目に映る。

背が高い、浅黒い肌をした男だった。シャツの上からBDUを羽織り、迷彩模様のズボンと真っ黒いブーツを履いている。眼光は鋭く、両頬から顎にかけてヒゲを蓄えているがそれとは逆に頭は剃り上げ、トライバル模様のタトゥーを入れていた。

男にウェイターが歩み寄り、二、三言葉を交わすとウェイターだけ去って行く。その場に残された男は辺りに視線をさまよわせると、不意にこちらの方を向き、歩いてきた。僕はできるだけ自然に顔の向きを戻す。ガヤガヤと騒がしい店内の中でも徐々に近づいてくる男の足音は力強く、よく通って聞こえた。

エヴィーテがコップを持った手を挨拶するように軽く頭の上を持って行く。後ろの方から「よう」と、低くドスが利いた声が飛んできた。僕の隣を通り過ぎた男はエヴィーテの隣の椅子を引くと、その上にどっかりと座った。

「戻ってたのか」

「さっきな。そう時間は経ってない。十五分くらい前だ」

エヴィーテは男と談笑を続けている。僕は自分のコップの水を少しだけ飲むと煙草をくわえて、じっと二人のやり取りを聞いていた。

「兵士達から聞いた、ノーランドの奴らから殺されそうになったんだって」

「ああ。出かけた先で襲撃された。幸いかすり傷一つ負わず無事に逃げてこられたが」

「あれほど気をつけろと言ったじゃねえか。銃に乗つけるダットサイトなんて今ので十分だろ」

「いいやダメだ。今のじゃ倍率も低いし、私はあの赤い点が嫌いなんだ。バレルだって短すぎる。精密射撃には適さないな」

「まあ、無事に帰って来れたのならそれでいいが。で、エヴィーテ、この坊ちゃんは？」

男が目だけを動かして僕の顔をみる。力強いその睨みに僕は居心地の悪さを覚えた。

「襲撃に巻き込まれてここまで連れてこられた、ただのしがないエングレーバーだよ」

短くなったタバコを灰皿に押しつけ火をもみ消した所で、ウェイターがやってきて僕とエヴィーテの前に料理を置く。空になったトレイを脇に挟んで去りかけたウェイターを呼び止めた男は追加で料理を注文すると、改めて僕に向き直った。

「エングレーバー？ エヴィーテ、お前は彫金師に銃のチューンナップを頼んだのか？」

「ガンミスは副業で、あくまで本業は彫金さ。まあ逆転しちやってるけどね」

「にしても若いな。銃をいじれるとは思えねえし、ましてやエングレーバなんてとても職人には見えねえ」

「人は見かけによらないもんだよ。で、お宅は一体誰なんだい？」

「俺はマクドネル。コイツの兄貴だ。何はともあれ妹が世話になったな」

マクドネルと名乗った男は、左手の甲で隣のエヴィーテの二の腕を軽く叩く。

「ノワールだよ。しかし、アンタ達似てないね、ほんとに兄妹？」

言いつつ、僕は目の前に置かれたパスタの山にフォークを立てた。シンプルなソイソースとガーリック、ベーコンの香ばしい匂いが口の中に広がる。

ウェイターがまたやってきて、マクドネルの前にコップとパンとチキンを置いた。油で手が汚れる事を躊躇せず、マクドネルはチキンをつかむと、かぶりつく。その姿はなんだかしとめた得物を補食する猛獣に見えた。

「お前さん、今日の寝床はどうするんだ」

チキンの骨をしゃぶりながら、顔を上げずにマクドネルが口を開く。口の中に放り込もうとしていたポテトの破片をいったん皿の上に置いた僕は、

「エヴィーテが担保してくれるみたいだし、そこら辺のホテルにでも泊まるよ」

「ホテルだあ？ やめとけやめとけ」

身が無くなった骨を皿の上に吐き出したマクドネルは今度はパンをちぎりながら呆れたように首を振る。

「ここら辺のホテルは町中と違ってサービスも悪いし、何より余所者は舐められやすい。俺たちがいるときはいいが、後から色々とふっかけられて金をふんだくられる。ただ寝泊まりするだけだったら俺たちの寝床を貸してやる。妹が世話になったみたいだしな」

「アドバイスはありがたいけど、あんたらの寝床ってのは安全なのかい？ 寝ている最中に吹っ飛ばされるのは御免だよ」

「いつ戦闘が起こるか解らない以上、その点に関しては何とも言えないな。ただ私は、見知らぬ地のホテルで一人で泊まるよりも、近くに顔見知りの方が心強いとは思う。ノワールの好きな方を選ぶといい」

ピッツアを嚙下したエヴィーテが僕の顔をじっと見る。僕は口元に手を当ててひとしきり悩む事しかできなかった。どっちを選んでもなんだかロクな事にならないような気がしたから。

車が停まったのは空っぽのガレージの中だった。先に降りたエヴィーテがガレージのライトをつける。奥の方に階段が現れた。後ろでマクドネルがシャッターを閉める音がする。隣に置いていたバッグを肩にかけ、僕は車から降りた。

こっちだ、と手招きするエヴィーテの後に続き、室内へと足を運んだ。

キッチンの隣にはツードアの白い冷蔵庫、居間の真ん中にはソファとテーブル、壁際には棚だけが置いてあり、そのほか無駄な物はいっさいない。とても簡素なりビングだった。

「まあかけてくれ」というエヴィーテの言葉に素直に従った僕はソファに腰を降ろす。僕の向かい側にエヴィーテが座った。それからしばらくして、マクドネルがテーブルの上に氷の入ったグラスを三つと酒の入ったボトルを置いて、上座にある独立した独り掛けソファに腰を座った。

「確かノワールと言ったか、まあ大変だったなあ今日は」

グラスに酒をつぎ、マクドネルは僕の前にグラスを置く。鼻に近づけてみると特徴的な香りは

無く、ただクセの無いアルコール特有のツンとした匂いがした。

「安心しな、普通のウォッカだ。嫌いか？」

「いや、むしろウォッカは好きだよ。クセが無くて。ただロックで飲んだ事は無いからちょっと心配なだけだよ」

「すぐに慣れるさ」

グラスに口を付け、少しだけ中身をすするとアルコールの苦みが広がり喉の奥が熱くなった。

「しかし連中、エヴィーテが町に出る事をどこで嗅ぎ付けてきやがったんだ」

グラスを傾けながらマクドネルは妹に目を向ける。

「解らないな。どこからか情報が漏れたか、元自国の連中に後をつけられていて、そいつが町のチンピラどもに吹き込んで襲わせたか。恐らく後者の可能性が高いだろう。具体的にどこに行くかは兄さんにしか話していないから」

「解せねえな、そこまでするようになったか。まったく穏やかじゃねえ。俺も用心しねえと」

空になったグラスをテーブルに戻したマクドネルは、ウォッカのボトルをつかむと二杯目を注ぎたした。僕は身を乗り出してテーブルの片隅にあった灰皿を引き寄せ、タバコを取り出すと火をつける。

「話しの腰を折るようで悪いけどさ、エヴィーテはどうしてわざわざ僕の所に来てカスタムをしにきたの？」

僕はエヴィーテの背後に目を向ける。木造の棚が一つぽつんと置いてあるだけだが、脇にはエヴィーテが持っている物と同じ形のライフルが立てかけてあった。しかし、ついているのは筒を二つ合わせたような形をしたドラムマガジン、銃身下部にはグレネードランチャーがくっついていた。

「カスタムパーツは、溢れてるみたいだけど？」

「簡単なことだ」

笑いながらエヴィーテはウォッカをあおる。

「ここは絶賛戦争中で、パーツや銃は向こうからやってくるが、必ずしもそれが銃に合うとは限らない。今までドットサイトを使って狙撃をしていたが、流石にやりにくくてね。バレルはそのついでさ」

なるほど、と首を縦に振りながら僕は灰皿にタバコの灰を落とす。狙撃が困難なのであれば、普通に運用すればいいのにと思ったが、後方支援がたりていないだとか内部の事情に絡む事になりそうだから、それを口に出すのは止めておいた。

「僕の所に来た理由は解ったよ。で、そろそろ銃の入手経緯について話してくれてもいいんじゃないかな？」

言ってる事が理解できなかったのか、首を傾げるエヴィーテだが不意に思い出したように何回か頷き、

「そういえば話す約束だったな。忘れていたよ。……その銃は自治州が独自に作成したものだ」

「作っただって？」

「ああ、まだ実験段階だがな。形は変わっているが、両国の装備のほとんどに互換を持たせ

ているから拾った物でも十分役立つ事ができるし、エモリアは小規模だが石油がとれる。それを精製した合成樹脂でフレームを作っているから両国の銃よりもずっと軽しい、グリップは町の医師が人体工学を元に設計し、誰が握ってもしっかりと保持できる。なかなかの優れたものだろう」

思わず眉間に皺が寄った。パーツを奪えるのであれば銃だって奪えるはずだ。それを使えばいいものを、何だっかわざわざそんな面倒な事に二年も費やした？ しかもそれだけこだわっていればそれ相応の金もかかる。僕には時間と金の無駄遣いとしか思えなかった。

「顔に出てるぞ、ノワール」

マクドネルがそう茶化す。僕はそっぽを向いて煙草をふかした。

「ノワール、銃って何だと思う」

「僕には戦争の道具にしか思えないね」

即答した僕を見てマクドネルは喉を鳴らす。

「そうだ。銃は戦争の道具だ。だけど俺達はそれを手に取らないと自分の身を守る事も、抵抗する事も出来やしねえ。そう考えると身を守る道具とも言える。国で正式採用している銃は、その国の銃と言えると同時に軍のシンボルとも言えるだろう。しかし俺達は既に自由と解放も勝ち得ている。にもかかわらずしつこい元自国がいつまでも邪魔をする。戦争と何ら変わりはない」

背もたれから背中を離し、前屈みに体制を変えたマクドネルは僕の顔をジッと見つめる。全身にかかる威圧感を感じた僕は、彼と目を合わせられず胸元や顎の辺りで視線が彷徨う。

「俺達は軍だ。介入できない正規軍にかわり、元自国の進行に抵抗し、エモリアを守るもう一つの軍だ。それが奪った銃をいつまでも使ってちゃ示しがつかない。俺達の存在を奴らに知らしめ、畏怖させなければならない。その為に象徴として自分達の銃が必要だったんだ」

マクドネルから圧迫するような迫力が消える。ソニヤリとした笑みを浮かべた彼は、コップの底で壁に立てかけてあるライフルを指した。

「中身だけ揃ってても、外側だけ揃っててもダメだ。守るという意志、銃という形、両方がなければ俺達の象徴にはなっちゃくれないのさ」

コップをあおり、ひとしきり笑った後マクドネルは席をたった。

「さてと、明日は朝から訓練だ。俺はもう寝る。空き部屋が一つあるからノワールはそこを使ってくれ。エヴィーテが案内してくれるさ」

じゃあな、という言葉とともにマクドネルは部屋の奥へ消える。タバコを灰皿に押し付けた僕はコップの中身を一口飲んだ所で、

「変わっているだろう」

と、エヴィーテが漏らした。

「変わってるね。昔からああなのかい？」

「いや、違う。少なくとも終戦から五年、油田で作業員をしていた間はもう少し普通だった。兄さんが変わってしまったのは、民兵団を蜂起する少し前だよ」

深く息を吐いたエヴィーテはベストのポケットからタバコを取り出すとくわえて火をつける。再び口が開かれたのは、それが半分ほどの長さになった頃だった。

「きっかけは五年前、独立式典の時までさかのぼる。町の広場の真ん中に設置されたステージ

の壇上でお偉いさん方が演説をしていた。父はエモリアの町長だったから当然その中に父の姿もあった。何人目かの役人の話が終わり、ついに父が壇上に姿を現し、演説台の前に立ち咳払いをしたとき、突然辺りが光に覆われ、音という音が全て吹き飛び、その次に自分の体がふわりと浮いて、立ってられず私は地面に倒れ込んだばかりか、そのままゴロゴロと地べたを転がった。相変わらず何も聞こえないし、頭を打ったのかズキズキと痛くて、まあ要するに何が起こったか解らなかつたよ。そんな私が顔を上げたとき、目に飛び込んできたのは元いた場所に呆然と立ち尽くしている兄さんの背中と、ステージがあった場所からあがる炎と黒い煙だったよ」

僕はエヴィーテの声に耳を傾けながら記憶を探る。エヴィーテが言っている爆破事件はベーゼルさんが保管している新聞のスクラップで呼んだ記憶があつたような気がした。

「その後の調べで炎のあがり方や破片やらで、戦時中ノーランドがつかつていた爆薬の炸裂のしかたに似ていることが解り、会場を吹っ飛ばしたのが元、自国ってことが割れたんだ。それから一週間も経たずにエモリア内でノーランド人の襲撃が起きるようになった。君の国がノーランドに詰め寄っている真っ最中にだ。それから兄さんは変わっていった。最初兄さんは、正規軍の対応に身を任せていたが、思うように攻撃できないと解るなり、自ら銃を手に取り殺し合いに身を投じるようになった。そんな兄さんの周りに徐々に同じ怒りをもった人が集まり、気づいたら民兵団が組織されていたんだ。隣にいながら私はそれがしばらく信じられなかつたよ。優しく思いやりのある自慢の兄さんが、歯茎をむき出し、怒号をあげ、猛獣のように同じ目と髪の色をした同族を殺しているなんて。温厚な兄さんの人格を変え殺戮に繰り出させるほど、父の死と元自国への失望、何よりもやつとの事で手にした平和をぶち壊された事への怒りは巨大な物だったんだ」

ほとんど灰になってしまったタバコをエヴィーテは灰皿の中に投げ入れた。空中で灰が折れ、カーペットとテーブルの上に舞い落ちる。

「私は、野獣にはなれなかつた。兄さんのように最前線で銃を撃ち、仲間を煽動する事なんかできない。一人置いてけぼりを食らってしまった私にできる事は、せめて暴走する兄さんが死なないように、後ろから援護射撃をする事だけだよ。……すまないな。疲れている中、こんな与太話につき合わせてしまって。さあ部屋に案内するよ。ああ、コップはそのままでもいい」

ため息をつき、エヴィーテは肩を落としたかと思つたら、顔を上げ無理に笑ってみせると立ち上がり、部屋の奥へと歩き出す。僕もその後に黙って続いた。結局はエヴィーテもエモリアの人間だったという訳だ。辛いのに無理に笑ってごまかしている。そんな彼女にかけるような気の利いた言葉は思いつかなかつた。

シャワーを浴び終わった僕は、案内された部屋のドアを開けた。ベッドが一つ、部屋の片隅においてあるだけの殺風景な部屋だった。バッグをヘッドボードに引っ掛けて少しカビ臭いベッドに寝転がると、毛布をかぶった僕はぼんやりと天井を見上げた。

ガルディ広場爆破事件。確かそんな名前だった。

店を構えた頃、下のカフェで食事中にラジオから流れていた事件の名前を僕は、ようやく思い出した。確か民間人の死者はさほどでなかつたけど、政府の要人六名が重軽傷、一人が死亡したはずで、死んだその一人こそエヴィーテとマクドネルの父というわけか。戦争ならともかく、テ

ロリズムであれば大成功だ。要人側に余計な死者を出さずターゲットであるエヴィーテ達の父を殺害する事ができたのだから。

エモリアの独立は既に決定してしまっているのだし、町長一人を殺してもどうにもならない事はノーランド側も承知していたはずだ。にもかかわらず、わざわざ町長が壇上にあがったタイミングで会場を吹っ飛ばしたのはただの見せしめでしかなく、恐らく最初からそれが目的だったに違いない事は明らかで、二人がこの事実気づいていない訳が無い。

他人の事で煮え切らない気分になるのは久しぶりの事だった。また、こんな風に思える自分が不思議だった。

父さんが死んで以来、自分が生きて行く事に、自分を保つ事に必死でいつしか僕は自分以外の人間に興味を持つ事ができなくなっていた。共感する事も、ともに何かを楽しむという事に喜びを見いだせなかった。そんな僕が、人事にわだかまりを抱いている。胸糞悪いと感じている。なんと久しぶりな感覚だろうか。

しかしエヴィーテの話で改めて戦争というもの実感できた。

人が一人殺されてしまうだけで、国同士の大きな物でも、個人レベルの小さな物でも戦争という物は起こってしまう。それは人を殺してしまう事で第三者を傷つけ、戦争に駆り出す。そしてその戦争でまた人が死ぬ。マクドネルは父を殺した者と同じ、死者となる覚悟ができているからこそ人の皮を脱ぎ、野獣になれたのだ。エヴィーテはそれが無いから兄のように振る舞えない。

(でもそれでもみんな一緒だ)

僕は目を閉じ、体を丸める。標高が高い所にいるせいか夜の空気が町の中よりずっと寒い。

誇りや善得を旨にして、その身を削り込んで戦い続けても結末はいつも破壊で幕を閉じる。銃や兵器は僕から全てを奪った。そしてこれをもって人を殺すという事は、第三者を傷つけるだけでなく、自分の格も死者と同等におとしめる。だから人は人を殺す事に恐怖し、それが禁忌とされているのだ。その罪を犯している以上、襲撃してくるノーランドの連中も民兵団も死者なのだ。エヴィーテのように死者になりきれでなくとも、なってしまったという事実には変わりはない。戦争は死者が死者を量産する無益な争いだ。

(では銃を直す僕は何だ)

ふとそんな疑問が頭をよぎる。人の格を死者へと落とす道具にまた命を吹き込み、より効率のいい殺しができるように改良し、殺戮の場に送り出す僕は何なんだ。死者か？ 違う。僕は殺しはしてない。では何だ？

「僕はエングレーバーだ。死者じゃない」

否定せずにはいられなかった。しかし、事実は変わらないという事は自分が一番知っていた。

たまたま僕は起き上がった。バックの中に手を突っ込みタバコを取り出すと口にくわえ、火をつける。煙を吸っても落ち着かない。いつの間にかジットリとした汗をかいていた。

父さんは戦争で僕をかばい死んだ。その時今までの僕は死に、現在の僕が生まれた。また死者になるのは御免だった。だから殺しだけは何かあっても絶対にしないと決めていた。けど、父さんから教わった彫金だけでは喰っていけない。生きる為に仕方なくとはいえ、ガンスミスを始め

てしまった時、僕は死者の片棒を担いだのだ。その時点で「死者ではない」とは言い切れない。僕は既に半分死者になっていたんだ。今になって気づくとはなんて様だ！

カーペットも敷いていないうちっぱなしのコンクリートの床に短くなったタバコを押しつけ二本目に火をつける。それを吸い終わってもまだ落ち着く事のできなかった僕は外へでた。金色の月と銀色の星が出ていた。町中で見る夜空とは大違いだ。冷たい風が頬を撫でて行く。しばらくそれを眺めていると揺らいでいた心は多少落ち着いた。

背後でドアが開く気配がした。振り向いてみると、タンクトップの上から上着を羽織ったエヴィーテが立っていた。

「眠れないのか？」

エヴィーテは僕の隣に立ち星空を見上げながら行った。

「ベッドが違くと落ち着けなくてね」

「大丈夫か？ 真っ青だぞ」

深呼吸し、冷たい空気を肺に詰めた僕は心配そうに顔を歪めるエヴィーテに向き直り、

「君の銃にエングレーブを入れさせてもらえないか？」

「エングレーブだって？」

「もちろん、料金はとらない。どんな複雑な絵柄でもいい。巻き込まれたけど、面倒を見てもらった恩がある。それを返させてくれないだろうか」

エヴィーテの眉間に皺が寄る。いきなりこんな事を言われたら誰だって戸惑うに決まってるし、僕の様子がおかしい事も気づかれているはずだ。それでも僕はかまわなかった。

しばらく考えた後、エヴィーテは一旦家の中に戻り、昼間僕の工房で使ったオートマチックを持ってきた。

「断られるかと思っていたよ」

僕は思わず笑みを浮かべていた。

「ライフルには流石に無理だが、コイツならいい。よくわからないが、無料ならやってもらおうじゃないか。柄は……」

ポケットに手を突っ込んだエヴィーテはワッペンを取り出した。藍色の生地に銀の糸で咆哮する獅子が描かれている。

「これはあくまでサンプルだ。形は違ってでもいいが、獅子を入れてくれ。民兵団のシンボルなんだ」

「解った。今すぐ作業の取りかかりたいんだけど場所はあるかい？」

「今すぐにか？ 今日は休んだ方がいいんじゃないか？」

「どうにも眠れそうにないんだ」

「……ガレージの隅に作業台があるそこなら自由に使ってもいい」

「ありがとう」

エヴィーテから銃とワッペンを受け取った僕は自分の部屋へ戻り、バッグを持ってくるとガレージに降りた。明かりをつけると、作業机は簡単に見つかった。椅子を引き出した僕はそれに腰を降ろし、銃とワッペンを置くとバッグから紙とペンを取り出しそれに下書きを描く。

僕の半分は既に死者なってしまった。それに気づいてしまったからこそ、もう半分の生者の部

分を自分自身に証明せずにはいられなかった。そうしなければ、やがて僕の全てが死者になってしまいそうな気がしたから。そんなのは嫌だ。誰が生きながら死者へと落ちぶれてやるものか。僕は一心不乱に、下書きを書き続けた。

しわくちゃで、すっかりすり減ってしまった紙ヤスリを置いた時にはとっくに日が昇ってしまっていた。背もたれに背中を預けると背中中の筋肉と骨が引きつった。天井を仰ぎ、首を回すとゴキゴキと音がする。全身が強張り体が重く感じたが、不思議と眠気は無かった。

テーブルの上には僕の道具が散乱している。その真ん中に今しがたエングレーブを入れ終わったエヴィーテの銃があった。銃身にオークリーフを掘って銀色の塗料を塗り、獅子はグリップに入れた。文句の無い出来映えだった。自らが彫り込んだ溝に指を這わせると、改めて僕自身がまだ生者である事に実感できてほっとした。

「作業は終わったか、ノワール」

そんな声が聞こえ、隣を剥いてみると、腕を組んだエヴィーテがドアに寄りかかり、僕の事を見ていた。

「ああ、できたよ」

ドアから背をはなし、こちらに歩いてくるエヴィーテに僕は銃を差し出した。

「……すごいな。これを一晩で彫り上げたのか」

銃を裏返したり、溝や浮き彫りの獅子をなぞるエヴィーテは驚嘆の声を上げる。

「今何時だい」

「朝の十時を回った所だ。もうすぐ昼になる」

「もうそんな時間か。道具を片付けないとね」

僕は机の上に散らばる工具を一つずつ拾い上げバッグの中へ戻して行く。

「なあノワール、何があった？ 昨晚の君には鬼気迫る物があったぞ」

そんな僕にエヴィーテは声をかけた。その顔は、それ以上言わずとも話すまで引き下がらないと言っていた。僕は腕を組み、眉間に皺を寄せる。しばらく考えた末、僕はこう切り出した。

「昨晚、僕を嵐が襲ったんだ」

「嵐？」

「そう。半分死者となってしまう事に気付いた僕の精神に嵐が訪れた。それにより僕の情緒は乱れに乱れ、いても立ってもいられなくなってね。エングレーブを入れなければ気が収まらなかった。ついさっきそれが終わり嵐は去って、その後に残ったのは、僕の中にまだ生者の部分があるという自分自身への証明だった」

「言ってる事がよく解らないぞ？」

「当たり前だよ。僕自身も上手く飲み込めていないんだからエヴィーテには尚更だ」

エヴィーテの目が一回り大きくなった。その理由はなぜかは解らないけど、僕は自分の口の端がつり上がっているのを感じていた。

「でも、できたんだ。君の銃に彫金を施す事で、僕は自分に生者の部分を見いだせたんだ。僕はまだ落ちぶれちゃいない。半分は死者だが、もう半分はまだ生者だと胸を張って言い切れるよ

うになれたんだ」

バッグの中に道具を全て詰め終わった僕は椅子から立ち上がると、エヴィーテの脇を通り過ぎる。エヴィーテは僕をとめなかった。自室に戻った僕はベッドに腰掛けるとタバコを一本ふかした。それが吸い終わると、ベッドに倒れ込み、僕は知らぬ間に眠ってしまった。目が覚めたのは夜の帳が広がっている頃だった。

山道を車が走っていた。僕はその車の助手席で頬杖をつき、ぼんやりと流れて行く景色を眺めていた。隣の運転席ではエヴィーテがハンドルを握っている。車が揺れる度、上着の間から銃のに入ったホルスターが見え隠れしていた。

「なんなら、弁償しようか」

「何をだ？」

前を見続けながらエヴィーテはそう返す。

「銃だよ。あの後冷静になって考えてみたんだけど、僕の勝手につき合わせてしまってすまなかったよ。そのエングレーブは戦場に置いて何の意味も持たないでしょ？」

「そうだな……でも、いい。銃ならいくらでも奪える。この銃も元々私のじゃない。次の銃が見つかるまで使わせてもらうさ。それに、エングレーブが入っている銃もなかなかいい物だ」

しばし車内に沈黙が立ちこめる。それを破ったのはエヴィーテだった。

「ノワール、君はこんな話を知っているか？ とある詩人の事だが、その詩人はとある女性に恋をした。詩人はその女性に何通も手紙を送って、とうとう返事が来て交際を始めるのだがとある嵐の夜に失恋してしまう。その晩ベッドで全てを振り返った詩人を嵐が襲ったそう。その嵐が過ぎ去ったとき、詩人は今後雑多な事は語らず、本当に自分の言語だけで世界を表現をする事を決めたんだ。昨日の君の話と似ているとは思わないか？」

「どういう事だい？」

「詩人は自分の中から自分の言葉で世界を表現するという、もう一人の自分を生み出した。始めて君とあった時、君はひどく冷めていてあまり人間味を感じなかったが、その嵐とやらを乗り越えた後、経緯を話す君からは今までに無かったその人間味を私は感じた。君は昨日、君の中から新たな君を生み出したのではないかと言う事だ」

「……そんな実感は感じないよ。僕は僕だもの」

「兄さんだって、昔はもっと穏やかだったと言っても毎回不思議な顔をして、決まって俺は何も変わっちゃいないぞ、という。確かにあの日を境に変わったのに。そういう物には実感は湧かないものさ。自分自身がそれに気づかなくとも他人が気づけばいい事なのだから。そうやって人は今までの自分の中からまた新たな自分を生み出して行くのだと、私は思う。現に君は昨日何かを感じ取ったのだろうか？ ではその感じ取る前の状態に戻れるかと言ったら、不可能だ。今までの君は死んでしまったのだから」

ガタンと車が大きく揺れ、走行音が静かになる。前を見してみると地面が野道から舗装された道路に変わり、正面に小さく街が見えた。

「そういう物なのかな」

「そういう物さ。生き物は常にそのままで入られない。でなければ、より過酷な世界で生き抜けないから嫌でも成長しなければならないからな」

僕は目だけを動かしてエヴィーテの横顔を見る。相変わらずエヴィーテは前を向き、車を運転しているが、その顔はどこか含みのある笑みを浮かべていた。

数時間後、街についた僕達はニコロの所に車を返しにいった。頼んでおいた通りニコロは車を回収、修理しておいてくれたようで、僕とエヴィーテの車は真新しいタイヤを履いていた。

「世話になったよ」

自分の車のドアにキーを指すエヴィーテの背中に向けて僕は言葉を放った。エヴィーテは車のドアを開けつつ振り向くと、

「ノワール、君はまだ若い。生まれ変わった今の君もいつか死に、また新たな君を生み出していく事になるだろう」

「エヴィーテだって若いじゃないか」

「そうかもしれないが、君よりは年上だ。たかが数年の歳の差かもしれないが、その分長く生きていくという事は、その分色々な事を経験しているものさ。生まれた場所や環境が違えば尚更だ」

ニヤリ、と悪戯っぽく笑んだエヴィーテは運転席に乗り込みドアを閉める。エンジンをかけたのか、車が音をあげ、震えた。

「それじゃあここでお別れだノワール。短い間だが楽しかった。君の今後に期待するよ」

ウィンドウを開き、エヴィーテは僕にそう告げる。

「こっちこそ世話になったよ。マクドネルによろしく言っておいて」

コクリ、と頷き、エヴィーテはウィンドウを閉じると車を出した。別れにしてはあまりにもあっさりとした別れのように思えた。

数日後、警察の家宅捜査、事情聴取やら壊れた店の修理が終了し、再び工房を開く事ができた頃、僕は下のカフェで昼食をとっていた。店内には僕以外の客がおらず、店主は無表情でグラスを磨いている。

ドアベルが鳴り、一人の男が入ってきて僕と座席を一つ空けた隣に座り、店主に料理を注文すると新聞を読み始めた。しばらくして、店主が男の前に料理を置き、男は新聞をたたんで僕の隣に置いた。昼食を食べつつその文面にふと目を向けるとエモリアについて書かれた記事が載っていた。僕が一声かけると男は新聞を読む事を承諾してくれた。

記事を詳しく読み込んでみると、どうやらエモリアでノーランドとレジスタンスが激しくぶつかったらしい。なんとか退けたみたいだが死者やケガ人が今まで以上にでたらしい。それだけ読めれば十分だった。

男に新聞を返し、僕はタバコをくわえ火をつけた。新聞に書いてある死者やケガ人にマクドネルやエヴィーテが入っているか否かを確認したい所だが、あいにく彼らの連絡先を僕は知らない。せめてものの無事を祈りつつ、灰皿に灰を落とし、半分ほどの長さになったタバコをくわえ直

した僕は、カウンターの上に代金を置くと店を出た。